

憧れ



札幌市医師会
岡本病院

對馬孝雄

それは、北の大地への憧れでした。

私は、津軽に生を受けました。

初めてブラキストン線を越えたのは、小学校の修学旅行の時でした。今は無き国鉄の青函連絡船に乗り、函館まで来たようです。実はほとんど記憶に残っていません。

はっきりと覚えているのは、中学校の修学旅行です。初夏の頃やはり連絡船に乗り、国鉄の汽車に乗り継ぎ、札幌までやって来ました。バスで北一条通りの大鳥居の下をくぐり、円山動物園を見学しました。大鳥居やさまざまな動物を大はしゃぎでカメラに収めていたことを、今でもはっきりと覚えています。

それから4年後、再び私は北の大地に降り立ちました。大学受験の時期でしたので、厳しい天候でありました。札幌駅前に宿泊し、札幌駅から受験会場下見のため地下鉄に乗りました。乗車したときは確かに晴天だったのですが、2駅乗車後下車したときは猛吹雪になっていました。厳しい北海道の自然の洗礼を受けるとともに、大学敷地の広さが地下鉄2駅間という大きさにも驚愕しました。受験からの帰り際に札幌駅前通りのガス灯(モドキらしいですが)の美しさに心を奪われ、必ずこの場所に戻ってくることを誓いました。

あれから四十数年が経ち、私は今年北海道では4回目の年男となります。この間に道内各地を旅行し、各地に居住しました。美味しい道産品をたくさん食し、みるみる体型が変わっていきました。たくさんの善き人々と出会い、善き諸先輩に学び、善き友と酒を酌み交わし、伴侶を得、子どもを授かりました。子どもたちからは『似非道民』と蔑まれ続けていますが、それでもまだ彼らよりは道民歴は長いです。

ただ近年では、年を重ねるごとに冬の厳しさに耐えきれなくなってきました。すぐに地下に避難するため、あれほど美しく思えた札幌駅前通りも、実際に観ることはほとんど無くなっています。改めてアイヌの人たちや、北海道を開拓した先人たちの偉大さを思い知るところです。

それほど遠くない将来に、この大地の一部になるのだらうと、覚悟を決めながら。

北の大地への憧れ、そして感謝。

『人の世の、清き国ぞと憧れぬ』

玄関先にて



札幌市医師会
明日風こどもクリニック

渡辺一人

朝、自動ドアを開放する。正面に伸びる玄関スロープの、東側の4本の柱を透かして横手から朝の光が差し込み、建物の壁に明暗の、オレンジ色のコントラストを映し出す。清涼な空気が入り込むと、奥まった玄関も目覚めるかのように朝を迎える。2代目となった赤柄の箒を手し、鼻と肌で、外の空気を読んでみる。箒を使うと、塵埃の影が朝日の中で、モワリモワリと揺らめきながら消えていく。隅っこの小さなダンゴムシは、箒が当たるとキュッと丸まるところと転がりだす。スロープの先の、まあまあの広さの駐車場で、散らばった小石を建物の脇の敷き砂利へと、掃いて片付ける。昨日来た子は熱があったけど元気だったな、と思い出して、砂利をはじめて歩くその子を想像する。北側は空き地でわりと見通しが良く、その2~3km先は海である。ウォーキングの老夫妻が、先生自らお掃除ですか、と問いかけながら歩いていく。診療の時間の他は、いつもこんな感じです、と心の中で答えながら、会釈する。

街路樹の下には4年前に植えたラベンダーなど様々な花が元気だ。雑草は毎日見て取っている。毎日が大事だ。春夏秋冬。春は雪解け、夏は虫、秋は落ち葉、冬は雪。箒は通り過ぎる季節を掃きゆき、まためぐってくる季節に備える。私もまた箒と同じ。四季折々の風と埃に命じられるかのように、ただ控えめに、玄関に立つ。落ち葉や虫も箒も私も大差はない。人間は考える葦である、という哲学の言葉は、本当は、偉そうに考えてみても、所詮人間は葦と同じだ、という意味ではなかろうか？ 朝日は白色に輝きはじめ、きれいなコントラストを見せていた柱の影の境も薄く淡く変わっていく。私の自問を、分別するな、つまらない、と大笑いされているかのようだ。下手の考え休むに似たり。ふいに、広い大地の上を箒でこすっている自分が思い浮かび、朝日につられるように、心中、晴笑。我、ただ箒を持って、是にあり。

早く出た小学生がまばらに登校していく。何かの練習でもあるのだろうか。真面目な顔で急ぎ歩いていく。すでに日差しは白光となり、影は地へうつる。半時もたてば、にぎやかになる。玄関先と私の、いつもの朝の風景である。